

# 都市化進展中における農民工の移動モデルの研究

## (論文要旨)

著者：侯 宏偉 学籍番号：13DC1501 指導教官：高橋五郎 教授

中国「農民工」の移動行為モデルが他の国と比べて、大きな違いがあり、即ち、「農民工」の移動が自分の故郷から流出したり、故郷に戻ったりしていることである。他の国では、人口の移動が故郷から流出し、さらにある場所に住み、仕事と生活をするようになるのが一般的である。中国の移動者たちの現状は他の場所に流出してから、その場所に長く仕事したり、生活したりする予期がないため、多くの農民工は「渡り鳥式」、「振り子時計式」と呼ばれる流動方式で短期的に、頻繁的に移動している。なぜ中国における労働力の移動は他の国と違う、労働力の移動を影する原因は何か、なぜ「農民工」が長い時間をかけて都市で仕事と生活をして、市民になれないのか、このような問題を説明するには、経済、政策のマクロ的要素と農民工家庭のミクロ的要素をあわせて、分析をしなければならない。

マクロ的な要素から見ると、中国経済の発展により、「人口が多くて、土地が少ない」基本的な国情に限られ、特殊の土地制度と農村・都市「二重構造」の影響から、生産資料とした土地の機能が弱化しつつあり、農業生産だけでは家庭の消費需要を満たすことができなくなった。それとともに、都市経済の高速発展により、大量の就業需要を創出し、農村余剰労働力が都市で稼いだ現金収入で家庭の消費需要を補填している。なので、農民たちが農業生産を通して、家庭生活に必要な実物（食糧など）を満たす一方、都市で稼いだ現金収入で子供の教育費用、住宅の建設などの現金需要を満たすような兼業形式が形成された。ミクロ的な要素から見ると、家庭は労働力移動に影響する重要な要素の一つであり、労働力移動決定を決定する重要な単位である。異なる家庭生命週期段階において、家庭人数、年齢の変化によって、家庭内部における労働力の移動も変わる。農家家庭内部の労働力の移動には、家庭生命週期の各段階の労働力の構造、子供の教育程度などの要素が労働力移動に影響する基本的な要素で

ある。

本論文は先行研究の成果を吸収したもとで、現地調査のデータを基づき、中国城鎮化の過程を背景として、家庭生命周期から農民工移動の全過程から出発し、農民工の移動モデルを研究する。具体的に三つの段階を分け、比較分析、訪問調査法と事例研究法を通じて、各段階の特徴と問題を研究する。主に農民工たちがはじめて都市に入る動機、職業の種類、都市選択の理由、収入状況、マクロ的背景があり、職業間と都市間での移動原因、都市に停留するコストと収益分析なども含まれている。本論文は農民工の具体的な移動行為の違いにより、農民工を「暫定移動者」と「永久移動者」二種類の群体、あるいは「体力型農民工」と「技術型農民工」二種類の類型を分けて、この二種類の農民工における異なる移動モデルの転換条件を研究することが重点としている。

本論文の内容は以下の三つの部分が含まれている。

第一部分は第1章と第2章を含めた研究準備である。第1章では、研究背景、目的及び意義、研究対象と基本概念、研究問題、研究方法、推進プラン、オリジナリティと不足などの内容がある。第2章では先行研究と本論文の分析基礎の説明である。先行では、典型的な理論への再度分析と世界各国における労働力の移動経験が主な内容である。分析基礎では、マクロとミクロを分けて説明し、マクロ的な分析では、二つの基本的な矛盾「人口が多くて、資源が少ない基本的な矛盾」と「都市と農村が分離している二元社会構造という体制矛盾」の基本的な二つの矛盾から1980年代から現在までの移動過程を三段階に分け、分析の基礎を作った。ミクロ的な分析では、調査対象の農家に系統的に分類し、家庭生命周期モデルの下で中国の実際的な状況に合わせ新しいモデルを分析基礎として作った。

第二部分は第3章と第4章を含めた三段階におけるマクロとミクロの分析内容である。まず、農民工が都市に入り、農民工になる第一段階では、中国市場経済の発展により、大量の農民が都市で稼ぐことを選択した原因は農村で農業生産だけでは家庭全部の消費需要を満たすことができないことにある。このとき、外出するか、どの都市に行くのか、都市でどうやって仕事をもらうかというようなことを決めなければならない。このような情報と資本を備えてから、

都市に入り、農民工になる。次に、都市間と職業間での流動—非永久性移動段階における第2段階では、都市で働き始めてから、ある程度の経験を積み重ねたとき、農民工はもう一つの選択を迎えた、継続的に現在の場所で働くのか、新しい仕事をするのか、現在の都市に停留するのか、他の都市へ行くのか。都市間と職業間の流動は長くてもいいし、短くてもいいが、毎回の流動は一つの決定過程であり、彼らはさまざまな要素を考えなければならない。例えば、新しいところの収入が高いか、故郷との距離が遠いか、家族に面倒を見ることができのかなどの要素がある。各要素を総合的に考えてから次の道を決定する。この段階はずっと続くこともあり、はじめてある都市に停留してから再流動するものもないこともある。最後に都市に定住—永久性移動段階における第三段階では、何回の流動を経験してから、農民工はある都市に適合な仕事を見つけ、この仕事は少なくとも彼の生活と収入をある程度保障できたら、彼をこの都市にしばらく停留させたが非永久停留するか、永久停留するかをまだ決定しなければならない。客観的に見ると、もしよければ、農民工は長年停留することを選択し、この都市をよく知り、都市で働くことに慣れることもある。心の中には農民と思っても、都市戸籍に変えたくなくても、人生の主な貢献と時間を都市に残り、実質的にも都市市民と変わらない。都市の仕事と生活は人生の大分な時間を占めた。主観的に見ると、この農民工は都市にいる時間がまだ短くても、都市の生活が好きで、都市で生活するために努力し、故郷との関連がだんだん薄くなり、一生都市に生活したいこともある。

第三部分は第5章の典型事例である。典型事例では、調査データから代表的な農民工移動事例を抽出し、その訪問内容を詳しく整理して分析し、暫定移動組と永久移動組を各二つの事例を取り上げた。その目的は第三章と第四章の内容をもっと現実的にわかってもらいためである。

第四部分では第6章の結論である。中国城鎮化の目標は都市で働く農民工たちを安定的に都市に住ませ、都市市民に転換させることである。永久性移動も最終的な方向と考えられる。本論文も農民工群体の中で、ある農民工は非永久性移動状態にいて、なぜ永久性移動ができないのか、どのような条件と要素のもとで、農民工群体を非永久性移動から永久性移動に転換できることが分析の

目的と重点である。農民工の外出と流動が全体の過程であり、どの段階を切り離したら、正しい答えを求めることができない。本論文は農民工の三段階から分析しはじめ、農民工全体の異なる段階における特徴と影響要素を見つけ、過程の転換中に非永久性移動から永久性移動への転換条件を求めることで研究を進んできた。

農民工に関する多くの研究がマクロ的な視点から政策分析及びミクロ的な視点からの実証分析である、マクロ的要素とミクロ的要素を融合して行う研究がほとんどない。本研究はその不足をある程度補填することができたと思われる。融合した重複研究によって、二種類の農民工群体を三段階の全過程において、農民工移動のマクロ的要素とミクロ的要素の間に強い関連があることを出し、非永久性移動から永久性移動への転換条件を出すことができた。ただ、本論文のデータは主に四川省の歴史的現地調査の資料を利用したため、中国他の地域の状況に正しい説明できることにさらに研究と検証する必要がある。